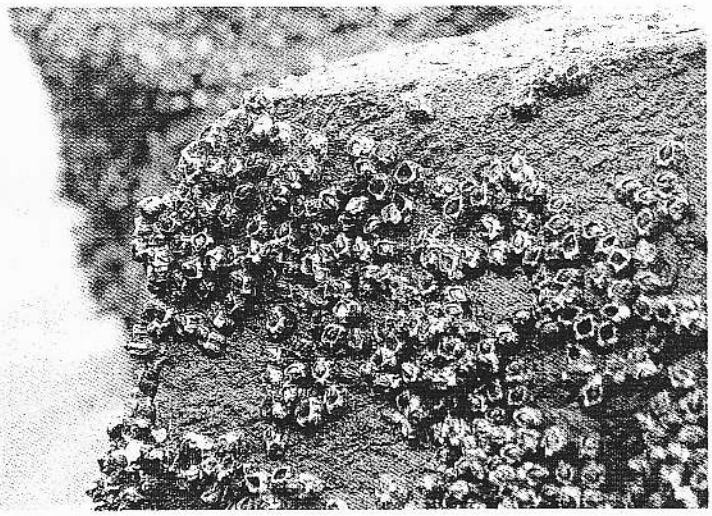
海新聞　日本海新聞 2013.1.25　（第3種郵便物認可）

鳥取・湖山池　汽水化で生態系変化

枯れたヒシやヨシ　フジツボが発生

環境改善などを目的に昨年3月に水門が開放され、汽水化が進む鳥取市の湖山池で、生態系の変化に伴う問題が浮上している。沿岸でこれまで生息が確認されていなかったフジツボが発生。伝統漁法「石がま漁」で使われる石がまには枯れたヒシやヨシが大量に入り込み、漁は存続の岐路に立たされている。（本社・清水友輝）



沿岸部の石に付着したヨーロッパフジツボ＝鳥取市福井の湖山池

石がまを所有する同市三津の田中正雄さん(58)は昨年夏、石がまが水没するほど池の水位が高まっていることに気付いた。11月ごろ、漁で追い込んだ魚が入る洞函（ほらはこ）の手入れをしようと見ると、中には大量の枯れたヨシが詰まり、石にはフジツボがびっしりと付着。「魚が入りにくくなり、タモ（網）も破れてしまう」と、今季の漁を取りやめた。

300年以上の歴史を持つ石がま漁の様子＝昨年1月21日、鳥取市三津

伝統漁法「石がま漁」存続の岐路に

田中さんは「フナを楽しみにしている知人も多いので残念。来年チャレンジするが、ヨシが枯れてフナの産卵場所がなくなり、捕れるかどうかは不明」と顔を曇らせる。

別の石がま所有者の男性は「漁船の給水管にフジツボがついて動かせない」と嘆く。石がまの内部にはヒシの実が大量に詰まり、網で30回以上かき出したという。

湖山池では最盛期には約60基の石がまが操業していたが、現在は4基のみ。高齢化や石がまの老朽化などで減少し、現在は地域住民らの努力で継続している。

県と市は1月26日、同地区で住民への説明会を開いた。住民からは石がまに入り込んだヨシやヒシなどの除去を求める声が上がり、県と市は対応を検討すると約束。市の担当者は「フジツボは想定外。来年の漁に間に合うようにできるだけ早く検討したい」と話す。

鳥取大地域学部の鶴崎展巨教授（動物分類学専門）によると、湖山池で見られるフジツボは外来種の「ヨーロッパフジツボ」。固有種と異なり、汽水域に生息できる特徴を持つ。

鶴崎教授は「地元の生物の専門家に意見を求めることも、環境アセスメントもせずに、水門を開放した」と行政の手法を批判する。

県が移植し、その後死滅が確認されたカラスガイを挙げ、「県で8種しかない特定希少野生動植物の一つ。自治体が絶滅させるなど、全国でも聞いたことがない」。

一方、湖山池漁協の邨上和男組合長は「フジツボは水の浄化にも魚の餌にもなり、いい面も悪い面もある。1、2年たたなければ、池の状態がどうなるかは分からない」と指摘。

「私たちにとっては生活の池。淡水の時は生活することもできなかった」と話している。

ミニクリップ　石がま漁　湖山池沿岸などで江戸時代の元禄年間に始まったとされる伝統漁法。魚が岩陰などで越冬する習性を利用し、大小の石を積み上げた「石がま」に入り込んだフナなどを中の「洞函」と呼ばれる箱に追い込んで捕らえる。漁期は1月下旬から2月末ごろ。全国的にも珍しい漁法で、現在は同市三津地区のみで続けられる。県の無形民俗文化財に指定されている。